

□6月30日説教(短縮版)「不思議な業の目撃者」
ヨハネによる福音書4:46～54 隅野徹牧師

今日私は、こだわりをもって「目撃する」ということばを使わせていただいています。目撃とは、ただ肉眼で見るということを超えた意味があり、「その出来事を自分のこととして受け止め、語り継ぐ」と辞書に載っています。そういう意味では本日の箇所に出てくる家族の全員が、イエスが癒し主であり、救い主であることを目撃者なのだと私は理解しています。

息子や他の家族は、不思議と熱が下がり癒されたところを経験したり見たりしました。しかしそこにイエスはおられませんでした。なにかよくわからないが不思議なことが起こったと思えたとしても、イエスが癒してくださったとは、すぐには分からなかったことでしょう。一方の父親も、息子が急によくなったその瞬間には、息子の傍にいませんでした。彼はイエスの癒しの業が行われたまさにその時に、肉眼で不思議な事象をみたわけではありません。しかしそれでも家族はイエス・キリストを、自分の救い主として信じることができたのです。

願いごとがかなえられたことを目で見るとして、自分で確認できたら信じるが、そうでなかったら信じるのをやめてしまうことが多いものです。しかし私たちは今日の箇所から、キリストは私の願い求めにかかわらず、いつも傍にいて最善をお導き下さるのだと信じて、ぶれずに歩む大切さを学ぶのではないのでしょうか。この役人のように、自分の願い求めが思う通りになったのかどうか確かめる前に、神・キリストを信じて一步を踏み出したとき、神の業は起こるのだと信じます。

神の奇跡を肉眼でみたら目撃者になるのではなく、むしろ、目には見えないけれど信じて一步を踏み出した結果、神の業は働いたと語り継いで生きていく人が、神の業の目撃者です。今日の箇所のイエスの語りかけをご自分への語りかけとしてとらえ、皆様、新たな一步を踏み出しましょう。(終)